

九条の樹 50

2014年6月

東久留米「九条の会」ニュース

発行：東久留米「九条の会」

代表者 古田足日・連絡先 鈴木Tel.042-473-9489

http://members3.jcom.home.ne.jp/higashikurume9/

メール：higashikurume9@jcom.home.ne.jp



日本国憲法 第9条

①日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

②前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

「戦争をする国づくり」に反対する 「立憲デモクラシーの会」の声明について

佐藤 学

学習院大学教授・東京大学名誉教授・東久留米「九条の会」

呼びかけ人・東久留米市在住

「戦争をする国づくり」に邁進する安倍政権の憲法を蹂躪する暴挙に対して、立憲主義の立場から

反対する「立憲デモクラシーの会」が組織されました。私も呼びかけ

人の一人として、この会に参加しています。この「立憲デモクラシー

の会」は、6月10日付で以下の要

点の声明を発表することになりました。憲法9条で否定されている「集

団的自衛権の行使」を、憲法を変

えることなく、国会の審議も行わ

ないで閣議決定で可能にしようとする安倍政権の暴挙に反対する声

明です。

安保法制懇と安倍首相記者会見

に関する見解(声明)

① 内閣の憲法解釈の変更によつ

て憲法9条の中身を実質的に改変する安倍政権の「方向性」は、憲法に基づく政治という近代国家の立憲主義を否定するものであり、「法の支配」から恣意的な「人の支配」への逆行である。

② 首相が示した集団的自衛権を必要とする事例等は、軍事常識上ありえない「机上の空論」である。また、抑止力論だけを協調し、日本

の集団的自衛権行使が他国からの攻撃を誘発し、かえって国民の生命を危険にさらすことへの考慮が全く欠けている点でも、現実的ではない。

③ 「必要最小限度」の集団的自衛権の行使という概念は、「正直な嘘つき」と同様の語義矛盾である。他国と共同の軍事行動に参加した後、「必要最小限度」を超え

るといふ理由で日本だけ撤退することなど、ありえない。また、集団的自衛権行使を可能とした後、

米国からの行使要請を「必要最小限度」を超えるという理由で日本が拒絶することなど、現実的に期待できない。

④ 安全保障政策の立案にあたっては、潜在的な緊張関係を持つ他国の受け止め方を視野に入れ、自国の行動が緊張を高めることのないよう注意する必要がある。歴史認識等をめぐって隣国との緊張が高まっている今、日本政府は対話

によって緊張を低減させていく姿勢をより鮮明にすべきである。」

安倍首相は、民主主義の法治国家の根本原理(立憲主義)を踏み

にじっています。共和制民主主義の国家の大統領・首相は、どの国でも、その就任式において憲法に

手をおいて法の遵守を誓います。安倍首相は、いったい誰に誓いを立てて首相の座についているのでしょうか。私には「ゾンビ」への誓いによって行動しているとは思えません。日本社会を「死神」に供する政治を決して許してはならないと思います。

東久留米キリスト者九条の会 講演会報告

岸 亮夫（同会共同代表）



キリスト者九条の会は去る4月29日に、昨年に引き続き成美教育文化会館にて講演会を開きました。

私たちの周囲、環境は日ごと
に悪くなっています。なにが悪
いか、つまり一言で言えば、大
政翼賛的“色合いが濃くなって
人々がそれに同調して、まっ
いいか、に流されてしまってい
ることにとても危機感を抱いて
います。

75年前日本は戦争に向かって

まっしぐらに進んでいました。
その当時キリスト教会もそれに
習って自身を曲げて行ったので
す。キリスト教の神と天皇(神)
の二人の神をいただいで幸いで
すと言っていたのです。

さて、今回のキリスト者九条
の会の講演会は日本キリスト教
協議会（NCC）教育部総主事
比企敦子さんに「アジアの一員
として生きる」（教育の視点か
ら）のテーマで話していただき
ました。Ⅰ教会教育、Ⅱ平和教
育、Ⅲ人権教育の3分野から語
っていたいただきました。

Ⅰ教会教育（日曜学校から
始まるキリスト教教育）或いは
ご存知でしょう、日曜学校、教
会学校という名称で子供のころ
教会にいったという人も少なく
ないのではないのでしょうか。そ
の教会学校は古く1907年に

発足しました。宗教教育として
展開していきました。後に戦時
色が濃くなり、その中で大きな
過ちを犯しました。「愛国心教
育」であった天皇制を基盤とし
た「国体」卓越性、アジア諸国
に対しての優越性を子供たちに
教えていきました。「教師の友」
皇紀2602年（1942・S
17年）の日曜学校では「美しき
日本」と題して「然し流石はヒ
ットラー。正しい所に目をつけ、

「それは日本が萬世一系の天皇
を戴いて世界に類のない立派な
国体を持っているからだ」と言
って羨ましがりました。」また、
1944・S19年2月号では「儘
忠報告」と題して目的を日本人
基督信徒こそ儘忠報告の精髓を
発揚し得る者であると鼓舞して
います。同じ教材の中に忠をツ
クシテ国に報いて・・・特に日
本基督教団の信徒である・・・
などと子供たちに愛国精神を教
え込んでいたのです。NCCは
敗戦後1947年に再発足して
戦争協力へ反省とその思いに取

り組んでいる。

Ⅱ平和教育の原点とは。

事実に基づいた歴史教育。排
外的民族主義の克服「教えられ
なかつた戦争」・教えられなか
った歴史

Ⅲ人権教育

・道徳教育↓キリスト教教育と
しての人権教育

・画一化 ↓個の尊重

・あるべき自分↓ありのままの
自分

・弱さの克服↓弱さの自覚・受
容

・異質性を排除↓豊かさとして
の多用途

・差別を助長↓差別意識への気
づき

課題として幾つかあげられた

●部落問題、解放教育

●心身にハンディを持つ子ども

●ジェンダー（性差別）問題

●平和教育、信教の自由・子ど
もの権利条約

など、かいつまんで報告しまし
た。

比企さんは多岐にわたり短い

時間を有意義に話してくださいました。話の最後に言われた言葉が印象的でした。

「平和は創り出すもの。集団的自衛権行使、解釈改憲を全面的に認めない。恒久平和を侵害する国家に都合の良い教育は学校でも教会でも認めない。」

地道な平和、

人権教育により

平和を創り出そう！

東久留米キリスト者九条の会は 旧約聖書 ミカ書4章3節「剣を打ち直して鋤とし槍を打ち直して鋤とする」また、ルカによる福音書19章39節「言っておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫びだす」をここに刻み込んで平和憲法を大切にしていきたいと願っています。



東久留米「九条の会」副代表の佐野正利さんが、5月30日にお亡くなりになりました。ご冥福をお祈りいたします。

◆お知らせ◆

- 平和を考える映画会①—東久留米「九条の会」主催—
長編アニメーション「蒼い記憶」—満蒙開拓と少年たち—
日時：7月13日（日） 13：30開場 14：00開始
場所：東久留米中央図書館 視聴覚ホール（資料代200円）
監督の出崎哲さんのお話しと上映会を開催します。

「平和を考える映画会」として、これから継続して上映会を開催していきたいと思っております。お誘い合わせのうえお気軽にご来場ください。

おすすめのもの、見てみたい映画などございましたら事務局までお知らせください。

- ピースの木 Tシャツ100展 Vol.6

日時：2014年7月17日（木）～20日（日）

10：00～18：00（最終日は17：00まで）

場所：スペース105（東久留米市役所向かい）・入場無料

⇒オリジナルTシャツ作りワークショップ 1人500円

主催・連絡先 憲法九条を守るなんでも展覧会 ピースの木 090-9333-1810（森田）



- 市民による朗読劇

日時：8月29日（金）14：00～ 場所：西部地域センターホール

- 「集団的自衛権」ってニャーに？！

落語で語る 憲法と私たちの暮らし—弁士：八法亭みややっこ こと飯田美弥子弁護士

日時：6月28日（土）18：00開場 18：30開演

場所：コール田無 多目的ホール 木戸銭：当日700円 前売500円

主催：SAVE ザ9条・SAVE ザ憲法 西東京市民の会 連絡先：西紘洋 042-423-5066

- 原発はいらない西東京集会実行委員会企画 <http://nonuke-ntyo.cocolog-nifty.com/>

⇒パネル展示「国策としての原発」—山本宗補氏原発写真展他—

日時：6月24日（火）～30日（月） 場所：柳沢公民館ロビー

山本宗補氏撮影 2014.2.26「東電福島第一原発収束作業現場公開取材写真ルポ」より転載

⇒講演会「国策による原発と、国策での戦争の共通項を考える」

講師：山本宗補氏（東久留米市在住のフォトジャーナリスト）

日時：6月29日（日）14：00～16：30 場所：柳沢公民館視聴覚室 資料代100円

*柳沢公民館（西武新宿線西武柳沢駅南口徒歩1分）

人間として

石藤千代子（南沢） ③

第二次世界大戦の終結時、私の伯父は、釜山（現在の韓国）で外科医院を開いていました。

若い頃、ドイツへ官費留学して最先端の医療を習得して帰国したばかりの伯父は「海難事故は大惨事が多いから、釜山で漁師たちを助けてくれ」と要請されました。それならと働き甲斐を求めて釜山に渡り、気がつけば二十五年経っていたそうです。

「医者はいかなるときにも患者を第一に」をモットーにしている伯父のもとには、昼夜を問わず怪我人がかつきこまれ、若い医師と交替で治療にあたりました。その合間に腹痛、風邪、子どものひきつけと、様々な病気の人も駆けこんできました。

伯母は伯母で、診療で忙しい伯父のそばで、使用人の母親役に努めたといえます。

看護婦さんや女中さん（当時の呼び方）、男性使用人は常時五、六十人いましたが、病院のモットーには「隔てなく区別なく」という一条もあって、現地採用の韓国人も内地から来た日本人も給料・昇進の点で平等でした。

和やかな雰囲気のおかげか職場結婚も多かったとのこと。韓国人同士、韓国人と日本人、日本人同士と組み合わせも様々で、伯母は親ごさんの説得やら結婚式の取り決めやらに東奔西走。「仲人が本業ではないか」と周りから笑われていたそうです。

こうやって病院の中では平和が保たれていましたが、戦争が末期に近づくと、外では日本人排斥の声が吹き荒れました。

昭和二十年八月十五日、終戦を迎えた日に、「大恩ある先生を今度は自分たちが助ける」と声を上げたのは漁師さんたちで

した。引き揚げ船よりも先に、自分たちの船で伯父夫婦を日本に送ってくれました。

小さな漁船ですから、発動機が故障した時のために手漕ぎの用意も怠りなく、屈強な漁師さんが三人ばかり乗りこみ、波の荒い玄界灘を命がけで渡りきったといえます。

日本に帰った伯父は、焼け跡にバラックを建て、すぐに病院を開き、戦争で負傷した人々の治療を始めました。何年かして、韓国の漁師さんたちが、伯父夫婦の安否確認のためにわざわざ来日して、互いに抱き合い無事を喜び合ったそうです。

伯父は、ことあるごとに「世界には国境があるけれど、人との間には誠意と人情があるだけだ」と言っていました。

伯父の一生は日清、日露戦争、第一次、第二次世界大戦…とほとんど戦争と共に在ったようなものですが、それだけに、心の底から出た言葉でした。

（聞き書き…高田桂子）

《平和を考える本》

『はるかなるアフガニスタン』

アンドリュウ・クレメンツ作



（講談社）

アメリカ・イリノイ州に住むアビーは六年生の女の子。成績不良のため落第となることを、特別課題にとりくむことで乗り越えようと目論む。それは、異なる文化圏の子どもと文通することだった。平らな土地に住むアビーは、高い山を持つという、それだけの理由でアフガニスタンの子どもを文通相手に選んだ。

手紙のやりとりが進むにつれ、宗教や文化、政治形態の違いからくる日常生活の違いを、両国の子どもたちは学び合い、新鮮な驚きをもって素直に認め合うようになる。

大人たちの思惑によって文通はやがて打ち切られたが、それでも子どもたちの心には豊かな思いが残った。

（高田桂子）